

異界のイマジネーション
— 宗教・神話・シャーマニズム —

下田 淳

宇都宮大学共同教育学部研究紀要 第73号 別刷

2023年3月

異界のイマジネーション

— 宗教・神話・シャーマニズム —

An Imagination of the Otherworld.
Religion, Myth and Shamanism

下田 淳[†]
SHIMODA, Jun

1. はじめに

古来、人類は神話、宗教、文学、芸術から近現代の心霊主義（スピリチュアリズム）にいたるまで霊魂の不滅や死後の世界を語ってきた。肉体は死んでも霊魂は生き残り、天国、地獄など「あの世」に行く。あるいは、霊魂が現世に戻り肉体を再び得る（生まれ変わり）。

肉体とは別に霊魂があるとしたなら、それは何なのか。デカルト(1)は、身体を物理的機械とみなし、それとは全く切り離された実体としての自我、つまり霊魂を想定し、それは不死とした。デカルトは、精神（霊魂）が脳の松果腺という個所にあるとした。ということは、松果腺が機能停止しても、精神（霊魂）は残るということになる。脳が機能停止しても、精神・意識があるとすれば身体とは別の「何か」（霊魂?）があることになり、これは、古来よりの心身二元論を明確に定義したものである。

ところで、身体・肉体とは別の何か（霊魂と呼ぶ）があるなら、それはエネルギーのようなものなのか、あるいは、スピリチュアリズムやオカルティズム（神秘学と邦訳されている）でいうアストラル体やエーテル体のような形質をもった存在なのか(2)。あるいは意識のみなのか。意識と霊魂はどう違うのか。

唯物論者や「まっとうな」脳科学者なら、意識は脳内のニューロンとシナプスの活動・作用であり、肉体の消滅で意識も無となると言うであろう。ここには死後生も霊魂も意識もない。

脳内作用が意識なら、死の瞬間（あるいはもっと前）は意識がないのだから、己の死を実感できないから、死は恐れるものでないという考えもできる。夢を見ていない深い眠り（ノンレム睡眠）時は意識がないのだから、われわれは毎日「死んで」朝に再生しているのだから、死もそういったものなのだろう。本当か？

深い眠り（ノンレム睡眠）の時意識が無かったと意識しているのは起きている時だから、深い眠りの時に意識がないなどわかるはずがないのではないか。脳波の測定では、覚醒時や夢を見ている時（レム睡眠）の脳波は、ノンレム睡眠時・麻酔時・昏睡状態の脳波とは大きく違うそうである(3)。後者は意識がないといわれる状態である。本当に意識がないのだろうか。脳波がない状態で「臨死体験」(後述)をしたという諸例が報告されている(4)。脳波がないのに意識があったということなのか。

肉体の死後、一時的に意識が、「この世に」残存することも考えられる。その場合、いずれ意識は消滅するから、すべては無となる。死後の世界（あの世）は存在しない。

肉体は滅びても意識・霊魂は「生き続ける」という観念、死後生や死後の世界が存在するという観

[†] 人文社会系 社会分野 (連絡先: shimoda@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

念は、世界宗教だけではなく神話の世界を見れば、あらゆる民族に普遍的考えであった。

死後生があると仮定しよう。それが実体をもった靈魂でも、実体のない意識でもよい。その場合、その靈魂や意識はその後どうなるのか？ 前述したように一時的に残存し消滅するのではないとしたら、その後どうなるのだろうか？ 仮に死後の世界があるとしよう。靈魂や意識は死後の世界で永遠に存続するのか。そうならば、それはそれで「しんどい」のではないのか？

近現代の科学は死後の後の考察を止めてしまった。確かに宗教学や民俗学、広く人文学は、この問題に関わる学問であった。ただ何か「限界」のようなものがあつたように感じる。もちろん、本稿が、この「限界」を越えようなどとは考えていない。本稿の目的は世界宗教、神話、シャーマニズムなどのなかの異界観を概観することにある。

2. キリスト教の異界

キリスト教の来世観は死後救済である(5)。「生きた身体」は死んでも、そこから分離した魂は不滅である。最期の審判の折りに肉体(身体)が復活し天国で永遠の至福が与えられる。アウグスティヌスによれば、復活したのは「靈的身体」で「生きた身体」とは区別されるらしい(『神の国』第十三巻、第二十三章)。また「第二の死」とは、地獄での魂の死に他ならない。魂の死が無になることだとすれば、こっちの方が良いという人もいるだろう。

キリスト教では、死後の靈魂は不滅で、最期の審判を待つ。最期の審判まで靈魂はどこにいてであろうか。神の意に沿った場所に保管されると初期の神学者は考えたが、後には、最期の審判までの待機所として、カトリック教会は煉獄という概念をつくった。天国と地獄の中間地帯である。煉獄の概念はプロテスタントや東方正教は否定したが、それならば最期の審判までの靈魂はどこにいてであろうか。ルターは、靈魂は天国のキリストの懷で眠っていると、墓で眠っていると言っているが、曖昧である。信仰があれば靈魂は天国に迎えられということなのだろう。最期の審判の前に靈魂だけ天国に昇るのは聖人だけではなく、信仰篤き者もそうであるという。したがって、プロテスタントは地獄を語らなくなっていく。

イスラムの来世観もキリスト教と同じ来世救済である。最期の審判で靈魂に肉体が復活し、天国・地獄行きが決まる。ユダヤ教から派生したこの2つの世界宗教の目的は同じである。最期の審判まで墓で眠っているという考えはイスラムにもあるようで、聖人は直行で天国、極悪人は直行で地獄行きだが、一般人の靈魂は眠っている。しかし『コーラン』を読むと、天国と地獄の間の「中間地帯」のようなものが設定されている。そこに人々の靈魂がいて、天国行きの靈魂と地獄行きの靈魂に話しかけてくる(『コーラン』胸壁-メッカ啓示、全205「206」節)(6)。

天国と地獄の間の「中間地帯」の発想はゾロアスター教由来である。ゾロアスター教によれば、死後の靈魂はハラ山に架かるチンワト橋を渡って天国に行くが、悪人は橋幅が狭くなり落下して地獄行きとなる。その橋のたもとで、どちらにも行けない靈魂が留まっている。

いずれにせよ、天国という死後の世界は至福の世界である。ただそこに永遠に留まり続けるのは「しんどい」のではないのか？ 一神教は「神の国」の後には考えない。そこが終点である。永遠の終点である。

3. ゾロアスター教とエジプト『死者の書』

ゾロアスター教の特徴は、神による世界の初めと終わりという限定的時間軸を設定したこと、審判による死後の世界(天国と地獄)の選別である。

それに対比するのが永遠的時間概念である。世界は破壊されても再生され続ける。人間も転生を繰り返す。おそらくこっちの方が歴史は古い。新約聖書には、もともと転生の概念が示された箇所があったが、553年の第2コンスタンティノープルの公会議で削除された。旧約聖書正典、いわゆるタナハ(1世期成立)には載っていないが、ユダヤ教の概念の1つであったことは後のユダヤ神秘主義(カバラ)を見れば明らかである(7)。これは、後述するプラトン主義の影響である。

ゾロアスターは永遠をやめて時間の終わりを設定した。世界の始めは、アフラ・マズダーという神による世界の創造である。世界の終わりは救世主サオシュヤント神が悪神アーリマンを倒して善の勝利である。さらに、すべての靈魂に肉体が復活して、世界が終わる。この発想がユダヤ教に影響を与えキリスト教とイスラムに影響したことはよく知られている。ゾロアスター教の肉体の復活は後代のイスラムの影響という説もある(8)。

他方、世界が永遠ならば人間の靈魂も永遠的時間を生きている。死後の世界が永遠と続くか、あるいは現世や異界での誕生と死を永遠に繰り返すことになる(輪廻転生)。

エジプトのオシリス神は、冥界の12の州を毎夜旅し、死者の魂に語りかけ、邪悪であった魂をさとし、善い魂に光りを放って激励し、彼らの苦痛を癒やし、悲しみを散らしてやったという。オシリスは死者の鼻孔を開き、呼吸できるようにした。なぜなら死者の国には空気も風もなかったからである。そこには地上に善人と悪人がいたように、冥界にも善の魂と悪の魂がいた(9)。ここにはまだ死後の審判はない。

死後に審判されるという考えは、エジプト『死者の書』(紀元前1500～紀元前1000年頃)に登場する。したがって、審判という概念はあと付けで、エジプト人の原初的異界概念ではない。『死者の書』では、冥界の神オシリスによって善と認められた靈魂は冥界(楽園?)での復活(肉体が戻るということなのか)が約束される。審判で否定された靈魂は「第二の死」を宣告される。「第二の死」は靈魂の消滅、つまり無だろう。

紀元前2500年以降、ファラオの遺体を人工的にミイラにしたのは、冥界での肉体の復活信仰であるが、それには悪霊から身を守らなくてはならなかった。こうして「永遠の生」(肉体の復活)を獲得する場所が楽園となった。

『死者の書』では冥界はいくつかあったようだ。冥界が多層であるといことだ。1つはオシリスの支配する冥界で、ここは陰鬱な夜の世界である。しかし最終的にたどり着くのは楽園であった。ここで永遠の生(肉体の復活)を受けた。『死者の書』では輪廻転生は語らない。

冥界での審判、楽園での肉体の復活(生き返り)という物語の原型はシュメルの「イナンナ女神の冥界下り」にみられる。愛と豊穡の女神イナンナは冥界に興味を示し下ることを決意し実行する。冥界の入り口で門番に、姉の夫のグガルアンな神の葬儀に参列するためという嘘をついて侵入する。冥界の女王エレシュキガルの前で7神の裁判官がイナンナに死刑判決を下し、イナンナは死ぬ。しかし、エンキ神の力によって冥界で生き返り、地上に脱出するが、身代わりにドゥムジ神を差し出すというものである(10)。

イナンナの死は冥界の掟を破ったあるいは嘘をついた悪事の報いである。つまり審判である。生き返ったのは冥界であるが、シュメル神話に楽園はない。生き返った身体は現世に戻ることもできた。エジプト『死者の書』よりこちらの方が古い概念であるだろう。

死んで靈魂は冥界に行く。冥界で肉体が蘇り、現世に舞い戻るという観念は原初的なものである。あるいは冥界の靈魂が現世に舞い戻って新しい肉体を得れば「生まれ変わり」となる。これもかなり

古い概念であろうか？

エジプト『死者の書』にある、永遠の楽園(天国)での肉体の復活という概念は後世の産物であろう。これが、ゾロアスター教とともにキリスト教に影響したのだろう。

4. ヴェーダの異界

ゾロアスター以前のペルシア人の異界概念はヴェーダに見られる。

『リグ・ヴェーダ』(紀元前12世紀頃)(11)では死者の国は、もともと天界の最上層にあり、その神がヤマであった。死後の魂は祖先の住むこのヤマの国で幸せに暮らすことを理想とした。そのためヤマに供物を捧げる。天界3層、空界3層、地界3層で9層から成っていた。最高の天界はヤマの国で祖先の世界、次は不死界で神々の世界である。その下も神々の天である。地界の3層の説明はない。

『リグ・ヴェーダ』によれば火葬が一般的で、靈魂を祖先のもとに行かせることが葬送であった。ここには、審判も地獄の概念もない。輪廻転生もない。『アタルヴァ・ヴェーダ』(紀元前10世紀頃)に至っても同様である。

また、宇宙創造は、無=混沌=原水から唯一物あるいは意思が生じた。そして宇宙の創造に至る。神々の誕生はその後である。

『ブラーフマナ』(紀元前900年頃)によると、原水(混沌)→熱力→黄金の卵→創造主という順になる(シャタパタ・ブラーフマナ、11/1/6/1-3)。

『ジャイミニヤ・ブラーフマナ』(1・42-44)にヴァルナの子ブリグが異界遍歴する物語がある。第1の異界では人間が人間を切り刻み食べていた。第2と第3の異界でも同じであった。第4の異界では、女が大きな財宝を守っていた。第5の異界では、血の河を色の黒い人が守り、グリタの河では黄金の人が願望をくみ上げていた。第6の異界では蓮の花が満ちて蜜の河が流れていた。ブリグが帰って父に見たことを伝えた。第1から第5までの異界は現世の罪の報いの結果で、それを逃れる贖罪方法が語られる。第六の異界は「我が世界」とヴァルナによって言われる。楽園である。

異界への飛翔と人間の解体はシャーマニズムのイニシエーションを想起させる。6つの異界は、天と地の6層に対応しているか(空を入れると9層であったが)ただ、こちらには、因果応報(審判)と地獄の原初的形態が暗示されている。ただ、悪行の報いとして落ちる地獄とは明言されているわけではない。

カルマ(業)による輪廻転生が現われるのは「ウパニシャッド」(紀元前800年~)になってからである。各自の業にしたがい、人間のみならず虫、蛾、魚、虎などにも生まれ変わる(カウシータキ=ウパニシャッド)。

心臓内にあるアートマンは米粒よりも、芥子粒(けしつぶ)よりも、その核よりも微細である。ブラフマンは一切(宇宙)である。この世を去った後に、アートマンをブラフマンに合一したいと願う人に疑念はない(チャンドーグヤ=ウパニシャッド)。これが解脱の概念である。

インドにおける因果応報による輪廻転生と解脱の概念は、先住民の思想と混ざることによって発展したのは明らかである。これがヒンドゥー教である。それに対して、隣国イランでは、ヴェーダはゾロアスター教へと発展する。ゾロアスター教でも因果応報は明らかである。善き魂はチンワト橋を渡りアフラ-マズダの支配する世界(天国)へ、悪しき魂は橋から落ちて地獄へ落とされる。

5. ヒンドゥー教・仏教の異界

ヒンドゥーと仏教の輪廻転生は、現世の行為(カルマ)＝業が来世の転生先を決定する。輪廻転生(生まれ変わり)の考えはアーリア人がはいてくる以前の先住民のものと思われる。そこにアーリア人の因果応報(審判)の概念が混入した。現世の行いの結果(審判)による転生先の決定である。

転生先は、最終的に「六道」にまとめられた。天界、人間界、阿修羅、畜生、餓鬼、地獄である。六道の解釈は様々である。天界は神々の世界である。人間界への転生はこの世に人間として生まれ変わる。畜生は人間界に畜生として生まれ変わるということなのか？阿修羅と餓鬼も人間界での境遇を指しているのか？いや、人間界以外は異界とも解釈できる。異界が多層性なのは、すでにヴェーダに見られた。仏教では六道は欲界に属する。上位に色界と無色界がある。やはり異界が多層なのである。

輪廻転生の永遠の繰り返しは苦である。しかし、一般人は、天界と人間界への転生を好んだ。善を成せば天界(天人)か人間に生まれ変わる。転生というのは靈魂が新たな肉体を得るということである。人間界に転生すれば現世への生まれ変わりとなる。

輪廻転生(サンサーラ)は、不滅の魂の永遠の循環である。だからインドの修行者はここから脱する道を解脱(モークシャ)という概念で表現した。解脱は魂の永遠の循環からの解放である。宇宙＝ブラフマンと自己の魂＝アートマンとの合一をいう。それは魂の消滅をいうのだろうか？あるいは、宇宙の一部となることなのか？

解脱して涅槃にいたった人が仏教では仏である。釈迦の解脱は、永遠不滅のアートマンの存在を否定することで得られるという。釈迦は、靈魂を否定しているわけではない。永遠に不滅なる存在などないと言っているのだ。輪廻転生を続けるのは、不滅の靈魂ではなく業(五蘊仮和合)のみであるという。

生まれ変わりの観念は、ギリシアのオルフェウス教やプラトンにもあるが、この観念は原初的なもののだろうか？ケルトのドルイド教も靈魂の生まれ変わりを説いたように、それは人間だけでなく動物にも生まれ変わるらしい。マヤ文明などにも同じ考えがある。

不滅の靈魂が死者の国や異界に留まるか、そこから脱して現世に戻るか、あるいは一段高位の異界に行くか？原初的なのは死者の国での永遠の滞在は耐えられないので、現世に再生するという観念、というより願望であろう。誕生、死、再生が永遠と続く。

西洋(ゾロアスター教からキリスト教とイスラム)は、いわば円環的時間を切って線にして最初と最後を創った。東洋(ヒンドゥー教と仏教)では解脱という概念で円環的時間を克服しようとした。六道の考えは、現生(人間界)とは別次元の異界が何層もあるという考えである。これは多くの民族にあって、エリアーデは、それを北欧神話から借用して「宇宙樹」と呼んだ。シャーマンは、何層もの異界を行き来できる特殊能力者である。

多層世界が木で想像されようが円で想像されようが、人間(あるいは全生物)の靈魂は、異界あるいは現世で肉体が復活・再生するというのが輪廻転生の原型であろう。ここに審判の観念を導入すれば、「素晴らしい異界」あるいは「地獄」に再生可能となる。

6. 死の創出

ユダヤ・キリスト教、イスラム、ヒンドゥー教、仏教あるいはゾロアスター教という体系的物語(教典)をもった世界宗教の歴史は、ホモサピエンス20万年の歴史からすれば、「最近の登場」に過ぎない。これらは、創造された死後の物語の可能性が強い。それ以前の人類の死後生および死後の世界像を見

るためには、世界宗教以前の神話を探ることから始めるのが適当だろう。

分子生物学の発展によって、ホモサピエンスは20万年前にはアフリカに存在した一集団とされている。10万年前頃、アフリカを立ち、世界に拡散した。もちろんアフリカにとどまった人々もいた。「出アフリカ」から世界への拡散過程もおおわく明らかになっている。アフリカを出たホモサピエンスは北へ向かう集団と東へ向かう集団に分岐した。東へ向かった集団はインド経由で東南アジアやオーストラリア大陸には5万年前に到達した。東南アジアから北上した集団は、北京付近に4万年前、日本列島に3万8千年前に到達した。ベーリング海峡(地峡)を渡って北東アジアからアメリカ大陸に移動したのが最終氷期の終わる直前の1万4500年前であった。他方、北に向かった集団がヨーロッパに4万5千年前、ロシアに4万2千年前に到達したと推定される。

「死の創出」神話はアフリカ全土にみられる(12)。

西アフリカのシエラ・レオネのコノ族の神話はこうである(以下引用文は、原文の省略等あり)。

むかし、最初の男と女と彼らの男の子がいた。至高神は彼らに、三人とも誰も死ぬことはないが、年を取ったら体に合わせた新しい皮膚を付けるはずだと言った。神は新しい皮膚を包み、犬に人間のところへもっていくように頼んだ。犬は包みをもって出かけたが、途中で、米とカボチャ(アメリカ原産だから改変されている)のご馳走にありついている他の動物たちに遭った。食事中に彼は包みのなかのものを訊かれて、最初の人間たちに送られる新しい皮膚の話をした。この話を横から聞いて、蛇はそっと抜けだし、包みを盗んで、他の蛇たちと皮膚を分けてしまった。犬はやむなく人間に皮膚が盗まれてしまったことを告白したので、人間らは神のところへ行行った。しかし時すでに遅く、蛇は皮膚を放さなかったで、それから人間は死ぬようになった。蛇は町から追放されてひとりて暮らすという罰を受けた。そして、人間は蛇を見つけたら殺そうとするのである(神話学では「脱皮型」といわれる)。

中国にも同じような話がある(13)。

昔は、人は死ぬ必要がなかった。年をとると皮を脱いだ。それで若返った。しかし皮を脱ぐのはたいへん痛かった。ある女が皮を脱ごうとしたが、三日三晩やってもうまくいかなかった。耐えきれず。神様、死んでもかまいません。脱皮は嫌ですとって、その女は死んだ。それから人は死ぬようになった。

再度シエラ・レオネのメンデ族の神話。

犬とヒキガエルが人類に死の伝言のために派遣された。犬は人間は死なないといい、ヒキガエルは人間は死ぬということになっていた。動物たちはそろって出発したが、途中で犬は道草を食った。彼は、こどもの食事を作っている女に遭い、おこぼれをもらうまで待っていたのだ。ヒキガエルは止まらずに、町まで来て、死が来たぞ、と叫んだ。ちょうどそのとき、犬が駆けて来て追いつき、生がきたぞ、と叫んだ。だが不幸にも遅すぎたのだった(「伝言型」)。

話の核は、神の使いの犬の失敗で(中国の場合は人間自身)人類に死がもたらされたというものである。犬の代わりに野うさぎや石女の失敗に帰するヴァージョンもある。これは不死である神の世界からの人類の追放である。

神の使いの失敗が死をもたらしたとする形態はブルー族にもみられる。

神がカメレオンを人間に送って、彼らは死なないだろうと通知することになった。しかしカメレオンはのろのろ歩き、途中で果物を食べた。次に、神は、人間が死ぬだろうと言って、トカゲを送った。トカゲが先に着き、通知を伝え、それを変えることができなかった。

ザンビアのランバ族の酋長はもとは遊牧民であったが、定住して土地を耕したいと思うようになった。種をもたなかったの、神に使いを送り、少しくださいと頼んだ。神は使いの者に包みをいくつか渡し、包みのうち特に1つは開けずにそのまま酋長に渡すように言った。神がこの点に固執したことは使いの者たちの好奇心を駆り立て、途中で泊った晩、包みを開けてしまった。彼らが禁じられた包みを開けると、死が出てきて世界に広がった。これは神との約束を破ったため、死が訪れた例である。

ザンビアのイラ族の神話である。

最初の男と女は、神から、1つは生を、もう1つは死をいれている2つの袋のうち、どちらかを選ぶように言われた。1つの袋はキラキラ輝いていたので、愚かな夫婦はそれを選んだが、それには死が入っており、数日後に子供たちの1人が死んだ。しかし、神は両親にもう一度チャンスを与え、彼らが子供を生き返らせてくださいと乞うたとき、もし3日間食事を控えるならばそれをかなえてやろうと約束した。だが、空腹に我慢できず少し食事を取ったので、それから人間は死ぬようになった。

これらは、神との約束を破ったので死が訪れるようになったという『創世記』の神話に通じる。不死の国からの追放は、『創世記』からの影響というより、反対に『創世記』の原型である。アフリカには、神との約束を破ったために、人間が死ぬようになったという神話が多く民族に残っている(14)。

オーストラリア・アボリジニには以下の神話が残っている(15)。

「夢の時代」にダイシャクシギの人々(意味不明)が姿を現した時、はじめに女性たちがやってきて、男性がその後続いた。男性の一番手は、女性たちにもあまりにもすぐ後に続いたと見なされ、他の男性たちに呪力をもつ骨で刺されて殺されてしまった。男を埋葬した後、女性たちが墓の周りを踊り始めると、死者は再びゆっくり地表を突き破って姿を現した。この様子を見たカササギは舞い降りてきて男を槍で突き刺し、それから彼を踏みつけて再び地中に戻ってしまった。悲しみにうちひしがれた女性たちはダイシャクシギに姿を変えて飛び去り、これにより人類は不死になる機会を失った。

ここでも人間の失敗の結果の死の創出である。嫉妬した男性による殺人がそれである。一度は死ぬが地下から復活する。最終的に男を殺したのはカササギ(これは嫉妬した男性と同意)である。

アメリカ先住民・ブラックフット族には以下の話がある(16)。

老人は自分のつくった世界に何か足りないと思った。粘土から女をつくった。子供をつくった。4日たつと女と子供は動けるようになった。女は訊ねた。私たちが歩いたり動いたり息をしたり食べたりする、今の状態は何なの？老人は言った、それが生きているということだ。女はいった。私たちはこの先ずっと生きつづけるの？老人は答えた。ここにバッファローの糞がある。もしこれが水に浮かんだら、その時人々は死に、そして4日後に生き返る。女は言った。だめよ、このバッファローの糞では水に溶けてしまうわ。私はこの石を投げましょう。これがもし浮かんだら、私たちは永遠に生きて死ぬことはないの。石を川に投げ込むと石は沈んだ。これで人間は死ぬことになった。

「老人」は神である。神は人間の不死を提案したが、ここでも人間＝女の失敗で(別の案を出した)で死が創出したという筋である。

カド族の神話では、この世界が始まった頃には、死はなかった。人があまりに増えすぎたので首長たちは集会を開いた。ある男が立ち上がり、人間を死なせてしばらくいなくないようにして、後で戻すようにしてはどうかと言った。次にコヨーテが飛び出して人間は永遠に死ぬべきだと言った。この小さな世界は人間を全部抱えるほど大きくないし、生き返れば全員に食べ物がいきわたらなくなるだろう。他の者は全員反対した。コヨーテを除く全員が、人間を死なせてしばらくいなくなるように

し、その後もう一度生き返らせるのがいいと決めた。メディスン・マンたちが小屋を東に向けて建てた。完成すると、部族のものたちを一堂に呼び寄せて、死んだ人間はこの不思議な部屋で生き返るのだと言った。メディスン・マンの長が、彼らはこの草の小屋に死者の魂を呼ぶためにある歌を歌うと説明した。魂がやってきたら、それを生き返らせよう。最初の男が死んだ時、およそ10日にわたって、西から旋風が吹き、草の小屋の回りで渦巻いた。コヨーテはそれを見て、旋風がまさに小屋に入ろうとした時に、小屋の戸を閉めた。こうしてコヨーテは死を永遠にした。

メディスン・マンはシャーマンである。コヨーテはトリックスターである。先のダイシャクシギの話同様、人間は死んでも蘇るはずであったが、トリックスターの策略で死が永遠になったという筋である。

死の創出は、当然死者の国の創出につながっていくだろう。

日本神話のイザナギとイザナミの話(17)では、イザナミが火の神を創る際に負った火傷で死んで、黄泉国(よもつこく)に行く。ここでは人間を創出する前に黄泉が成立している。黄泉は神々が死んで行く場所であったのか。愛する妻を失ったイザナギは彼女を取り戻すために黄泉に赴く。しかし、イザナミは黄泉の国の食料を食べてしまったから現世には戻れない(黄泉の食物を食べると現世に戻れないという神話はアメリカ先住民にもある)。妻を現世に連れ戻すチャンスはあった。しかしイザナギは、妻との約束を破って、妻の顔が見たくて櫛の歯を一本追って火を灯してしまう。そこに現出した光景は腐敗して蛆が湧いたイザナミの姿である。途中、イザナギは泉津平坂(よもついらさか)で大きな石を置いて黄泉との国と遮断した。イザナミは怒って一日に千人の人間を殺すと言った。これに対してイザナギは1日に1500人を生むという。人間の生と死は同時に発生したことになる。逃げ戻ったイザナギは「醜悪で穢れた国」=黄泉の穢れを祓うために禊ぎをする。

ギリシアのオルペウス神話も、妻の姿を見ないという約束を守れなかったため、現世への連れ戻しに失敗した。黄泉は地下にあるのだろうか。イザナミは穀物女神オホゲツヒメ(ゲは穀物)を生んだから地母神であった。地母神=豊穰神が黄泉津大神(ヨモツオオカミ。死者の国の神)に変身するのはエジプトのオシリス神と同じである。死者の国を地下とイメージしたからだろうか。その後、イザナギが逃げる途中、石でふさいで黄泉との往來を遮断したことによって、彼岸と此岸が隔たれた。

上述の神話群は、現世と「死者の国」はもとのと同じ世界であったが、別世界になったということを表しているのだろうか。あるいは、元の世界は不死の世界だけであったが、「死ぬべき人間の世界」が創出されたということなのか。しかし両世界は完全に塞がってはいない。死と誕生を通じてつながっている。

オセアニアの死の創出は半神半人の英雄マウイと結びつく(18)。マウイは女神ヒネに挑み、その身体=子宮の中で殺される。ここに死が誕生した。しかし、オセアニア人にとって死は故郷の冥界に戻ることを意味した。つまり現世の死は冥界での誕生なのである。

7. 神話のなかの死者の国

ところで、マイケル・ヴィッツの唱えた「世界神話の起源」によれば、人類の神話群は、 Gondwana 神話群とローラシア神話群から成っているという(19)。Gondwana 神話群はアフリカにいた時代のホモサピエンスが持っていた古層の神話で、最初の「出エジプト」で広まったものである。サハラ以南のアフリカ、インド、東南アジア、オーストラリアの見られるという。インドはアーリア人が入ってくる以前の神話である。東南アジアの先住民ネグリト系、オーストラリアのアボリジニ、太平洋の

メラネシア系である。「人種的」には「黒人」の神話となる。物語性に乏しく、個々の話のつながりが弱いという。

一方、ローラシア神話群は、エジプト、メソポタミア、ギリシア、インドのアーリア人侵入後、ヨーロッパ、シベリア、中国、日本、ポリネシア、ミクロネシア、アメリカ大陸の神話だという。こちらは物語性が強く出ているという。

これによれば、 Gondwana神話群は10万年以前まで遡れる。中東起源のローラシア神話群は4万年前頃形成されたという。しかし、人類のヨーロッパへの到達が4万5千年前とするならば、ヨーロッパにGondwana型が混入していても不思議ではないし、それは中国や日本でも同様であろう。また、古層のGondwana神話群から「より文明化」されたローラシア神話群という進化論的発想が理解できない。しかし、Gondwana神話群の方が古層ならば「真実」が隠れているかもしれない。本稿では、Gondwana神話群とローラシア神話群関係なく、各地の神話の「死者の国」を見てみる。

神話に見る「死者の国」は採取した欧米人によって、あるいは住民がキリスト教に改宗したことによって、かなりの変更されていることに注意しなくてはならない。それでも、基層を探ることはできる。

アフリカのムブンド族(20)の神話から始めよう。

ある王様が本妻の死に悲嘆した。家来たちに喪に服すよう、その期間は妻が帰ってくるまで解かないと命令した。長老たちは有名な医者に相談し、医者は彼の家のなかに墓穴を掘り、自分の小さな子供とともにそこに入った。妻には、墓に毎日水をかけるようにと指示して、墓穴は埋められ、医者と子供は死者の国に向かった。ある村に着き、そこで死んだ王妃を見つけた。彼女は彼らにどこから来たのかと尋ねた。医者が王が悲しんでいることを告げると、王妃はそばの男を差し、彼を知っているかと訊ねた。医者が知らないと答えると、王妃は彼は「死」(神?)で、すべてのものを消滅させるのだと言った。それから、鎖でつながれたもう1人の男を指し、医者を知っているか訊ねた。医者が王に似ている男を見て驚くと、王妃は数年のうちに王は死ぬだろうと言った。彼女は、人はいったん死ぬと帰れないのだと言い、医者が死者の国に来た証拠に腕輪を与えた。医者の妻が墓に水をやっていると、医者と息子は大地から現れ出た。医者は王様に報告し報酬をもらった。喪は解かれた。

ここでの医者はシャーマンである。シャーマンは現世と死者の国を自由に行き来できる者である。ここに描かれたのは天国でも地獄でもない。単に死者の国と描写されるだけである。シャーマンは死者の国から死者の魂を現世に連れ戻す役割ももっていた。シャーマンの息子は地中から現世に戻る際、日の光を見て失神した。これは死者の国が暗い世界だから現世の日光で失神したのか、あるいは死者の国から現世への通路(トンネル)が暗かったからだとい解釈も成り立つ。

ケニア・チャガ族のある女性は、ある事で悲嘆し自殺し死者の国に行った。彼女は老婆が子供たちと一緒に住んでいる小屋に着いた。老婆は女性の面倒を見、女性は老婆のために働き、死者の国の生活をともにした。長い年月ののち、彼女は家が恋しくなり、死者の国を去ることの許可を求めた。老婆は反対しなかったが、彼女に熱いのと冷たいのとどちらがいいと訊ねた。(この文脈意味不明だが、)冷たい方を選ぶと高価な腕飾りが付いていた。老婆は彼女にビーズの下着を与え、現世に戻り結婚した。

この老婆は死者の国の神であろう。死者の国では労働もあって、現世と同じ生活があるようだ。この少女はシャーマンである。シャーマンが現世に戻る保証が腕輪であった。少女がシャーマンであったのは、この話しの続きで、少女は結婚したが夫が殺され、少女が呪術で生き返らせたことからわ

かる。死者の国が現世の映し鏡のようで、人々は働き生活しているといヴァージョンは多い(21)。

北アメリカ先住民の神話では(22)、死者の国はこの世の映し鏡である。だから、武器、食物、衣服、装身具、食器など死者の国に必要な物を副葬する。「あの世」への旅は困難である。荒れ狂う流れの上の沈みかける橋を渡り、暗闇で野営し、大草原を渡って、ようやく美しい世界へとたどり着く。

アイヌの死後の世界(23)は、この世とまったく同じ姿をしているが、昼夜、上下左右など全く「あべこべ」である。死後の世界はポクナ・モシリと呼ばれる。神の国はカムイ・モシリで両世界は暗い穴でつながっている。この世はカンナ・モシリで、あの世とは暗い道でつながっている。あの世のこの世が穴(トンネル)でつながっているという話は臨死体験談に類似する。また、魂はこの世に再生を繰り返す。

オセアニアでは、靈魂は、西方にある特別な木の下に赴く(24)。ハワイではその木を「静かに招くパンノキ」と呼ぶ。木の枝の表面は乾いて折れやすく、反対側は緑である。乾いた枝をつかむと靈魂は「ポ」の深みに落ち込むのを免れる。ポリネシアでは、靈魂は無の世界のポに帰るか、死後の世界に入るかのどちらかである。死者の世界は現世の複製で、祖先が住んでいる。死者の国がどこに位置していても複数存在する。つまり死後の世界は何層にも分かれていて、その1つにポの次元があり、ミルと呼ばれる炉で靈魂は消滅する。ミクロネシアでは、死者の靈魂は死者の島か、天か地か、北方か西方に旅をする。死者の国の食料は無尽蔵である。悪行を犯したものの靈魂はもがき苦しみ、善を成した靈魂は祖先の世界(楽園)に行くという話は、明らかにキリスト教の影響である。

中米マヤではキリスト教の影響で楽園としての天国があるが、ここに4年間滞在した後、魂はもう一度現世に戻る。もっと高いところに昇らなければ、永遠にその循環が続く(25)。

南米アンデスでは、死者の国に入るには川を小舟で渡る。死者の国には耕地が準備されている。トゥパリ族では、人間は死ぬと「パピッド」になる。パピッドは死者の国に赴く。パピッドの国では女性は妊娠し子供を産む。病気になるパパイアで治療する。ペルーにおいては、魂は不滅で、いつの日にか別の世界(現世か異界)に生返り、その世界で飲み食い安楽に暮らす(26)。

ここでも死者の世界は現世の映し鏡が多く見られる。妊娠・出産は生まれ変わりの発想である。

それに比べて、メソポタミアの冥界は一見すると暗い。シュメルのイナンナ、アッカドのイシュタル女神が下った死者の国では、すでに神による審判(前述した死の判決)が登場する。これがエジプトに影響した可能性は大きい。一方、『ギルガメシュ叙事詩』には、ギルガメシュが暗黒の中を進んでいくと、まばゆい光の世界に到達するとある。そこは、宝石の庭があり、紅玉髓の木は実をつけ、ブドウの房が実り見るに心地よかった(27)。これは後述する臨死体験の描写に似ている。

冥界の入り口が「穴」でイメージされる場合がある。『旧約聖書』の死者の国シェオールの入口は暗い穴である。「もし主がこれまでにないことをおこなわれて、地がその口を開き、彼らと彼らに属するものたちをことごとく呑み込み、彼らが生きながら黄泉に下るなら、あなたがたは、これらの者たちが主を侮ったことを知らねばならない」(民数記、16章30節)。「彼らと彼らの属する者は、生きながら黄泉に下り、地は彼らを包み込んでしまい、彼らは集会のなかから滅び去った」(同33節)。「主よ、あなたは私の魂を黄泉から引き上げ、私に穴に下って行かないように、私を生かしておかれました」(詩編30章3節)。シェオールの入り口は暗いが、シェオール自体の描写はない。

シェオールとは別に「列王記」には預言エリヤが天に昇る話がある(28)。「一台の火の戦車と火の馬が現われ、この二人の間をわけ隔て、エリヤはたつまきに乗って天に昇っていった」(列王記、第二、1章)。二人とはエリヤと弟子のエリシャである。天は神のいる国である。天国に昇ったということ

であるが、エリヤの魂は、その後も弟子エリシャのもとにいるのである。「預言者のともがらは、遠くから彼をみて、エリヤの霊がエリシャの上にとどまっていると言った」。

ここでは天と地に異界があるが、天は神の国、地の黄泉は暗い世界といった、後のキリスト教の概念が暗示されているかのようだ。しかも霊は現世とも往来可能である。『創世記』28章には、ヤコブが夢のなかで、天に向かって梯子がかけられ、神の使いが上り下りしているという記述がある(29)。

立花隆『臨死体験』の体験談に、「私の姉は六才で病死したのですが、最期の言葉は、おかあちゃん、捕まえていて。穴へおちる、おちる、捕まえていてーといって死んだそうです。母は何度も私にそのことをいい、人間は死ぬとき、穴に吸い込まれるようになるらしいと申しおりました」(30)。この穴が異界に通じるのかはわからない。

ギリシア神話(31)の冥界の靈魂は透明で実体がなかった。冥界の神はハーデスである。ハーデース神は死者の国の名前そのものとして知られるようになる。ハーデースに行くには河を渡らねばならなかった。ハーデースの描写は太陽が行き渡らない暗い世界と記されているから地下にあったのだろうか。冥界に入る手前にペルセポネーの森と呼ばれる入り口があった。ここには黒いポプラと実を結ばない柳が生えていた。ハーデースの王国の門には、50の頭をもつ番犬ケルベロスがいた。ハーデースにはいくつかの河が流れており、レーテ川の水を飲むと過去を忘れた。ハーデースはプルトーンとも呼ばれ、その妻がペルセポネーであった。ペルセポネーは「光を破壊する女性」あるいは「目くらむような光明」が語源といわれる。両者は対立概念であるが、冥界が暗い世界では無く、光に満ちた世界でもある可能性も示唆している。ヘカテーも異界の神でもともと月の神であった。この異界は天界にあって、ヘカテーはカベイロスによって地下のアケロン河に投げ込まれ、冥界の神となった。ハーデースの臣下に、タナトスとその兄弟ヒュプノスがいた。

死者の靈魂は地上を離れると、透明な存在となった。勇気や知性は消えたが、特権的な人物は地上に住んでいた時と同様の生活をした。靈魂が、ハーデースと3人の補佐役によって審判される法廷に出廷したという話は、後世にものであろう。おそらくエジプトの影響である。

ローマ神話では、異界描写はほとんどない(32)。キケロは『国家論』のなかで、小スキピオは、祖父に、父パウルスや死者も実際は「生きているか」を訊ねる。大スキピオは、その通りだ。牢獄から解放されるように身体の束縛を逃れた人々はすべて生きている。一般にいう生は実は死なのだ、と語っている。異界から見れば、現世への誕生は死となるのだろう。

ギリシア神話やユダヤ教に、審判(裁判)の観念が持ち込まれたのは後のことである。オリエントの影響であろう。

ゲルマン神話のヴァルハラやケルト神話のアヴァロン(33)は、戦士たちの死後の楽園として描かれる。夜ごと饗宴が催される。これはキリスト教に影響された後世の産物なのか、あるいは日本の「常世の国」(中国神仙思想の不老不死の世界に類似)のように原初的なものなのか?これらの異界は海の彼方といったような水平方向に存在しているようにみえる。しかし、死者の国を三次元の観念で位置づけることは無意味と思われる。

以上を総合すると、死者の国は「暗い世界」か「現世の映し鏡」である。楽園の発想は後世である。因果応報は原初的にはない。

8. 生まれ変わり

「生まれ変わり」の話は怪しげな文献も多いが、ここでも神話のなかでみてみよう。

メラネシアでは(34)、靈魂は2つあって、1つは地下の死者の国に赴く。もう1つは人間を含めた動植物に入り込み、生まれ変わるといふ。死後の世界への道は危険で、死者の世界の入り口には門番がいる。死後の世界に入っても、普通の靈魂は影響力のある強力な靈魂に食べられるという。

アフリカ・モザンビークのロンガ族の話(35)。

水汲みにいく途中壺を割った娘が、悲しみのあまり、縄が欲しいと叫び(この文脈意味不明)、見上げると雲から垂れてくる縄が見えた。それを昇りながら、彼女は空中に荒れた村を発見した。そこに座っていた老婆が何が欲しいのかと訊ねた。彼女が身の上話をすると、老婆は、彼女に歩き続け、たとえアリの耳の中に潜り込んでもそのまましておくように告げた。娘はその通りにし、やがて新しい村につくと、アリが彼女に腰を下ろすようささやいた。門のところに腰を降ろすと、輝く着物を着た長老たちが来て、何をしているか訊ねた。娘は赤ん坊を探しにきたと言った(主題が変わったが、別話との混同だろう)。長老たちは娘を家に連れて行き、籠を渡し、畑からとうもろこし(アメリカ産なのでもとは別の作物だろう)を少し集めてこいといった。長老たちは、彼女の仕事の仕方と、アリの指示で彼女がつくった料理を見て喜んだ。翌朝、長老たちは、赤と白の着物にくるまった赤ん坊を数人置いた。アリが白い着物の赤ん坊を選ぶよう指示した。長老たちは彼女にその赤ん坊とたくさんの着物とビーズをくれた。それから彼女は家族のもとに帰る道を見つけた。選ばれた(誰に選ばれるのか不明)両親に赤ん坊が授けられる話は多いという。

ここでも冥界は現世の映し鏡となっているが、天に位置している。輝く長老たちは神々であろう。赤ん坊は現世に生まれる魂を意味しているとすれば「生まれ変わり」の発想である。

アボリジニーの神話に以下のような話がある(36)。

月のパールーは女の赤ん坊の作り手であった。カラスのワーンはその作業をときどき手伝った。森のトカゲのブーマヤームルはときには、パールーの手を借りて男の子を創った。パールーとワーンは一緒に住んでいた。ある日、ワーンは言った。いつも新しい赤ん坊を生まれさせる代わりに、死者にもチャンスを与えようじゃないか。彼らを生返らせるんだ。駄目だとパールーは言った。悪者の靈はエレアンバー・ワンダーと一緒にいる。善良な靈はブリマーにいるが、好きなところをうろついている。そのままにしておけ。ワーンは言った。

最近はたくさんのものが死んだ。みな死なせてしまうと、この世には人はほとんどいなくなるだろう。パールーは言った。心配するな。もっと赤ん坊を創れ。そして死なせろ。たびたびワーンはパールーに説いて死者を蘇らせることに加わせようとしたが、パールーは言った。放っておけ。死者の靈たちはもう他の人たちのなかに移っているかもしれない。中略。パールーと妻たちは赤ん坊づくりを始めた。ブーマヤームルが男の子をつくって協力した。この2人はたくさんの男と女の赤ん坊づくり、地上の子供たちとして生まれたり転生してくるのを待っている子供の靈を受け持つワラーグルンブーアンワンのもとに送った。前に子供だった靈や若くして死んだ靈たちは、自分が行きたいこの世の母の名をいうように彼に言われる。ワラーグルンブーアンワンは、その女たちのところへ化身させたり転生させたりする。靈の子供が待っている枝の下を最初に通る女はその子供に選ばれて母となる。

これは、靈魂の転生話である。若くして死んだ靈魂は、自分の行きたい母、とくに前に母親であった者の子として生まれ変わる。幼児死亡率の高かった時代の願望の反映に過ぎないのか。パールーは月の神でブーマヤームルは森の神である。月も森も異界であった。異界で新しい靈魂をつくったり、死んだ靈魂を現世に生まれ変わらせたりしたのである。

日本の縄文時代に、死産児を床下や便所の脇あるいは4つ角に埋めたという報告がある。これも死んだ子の生まれ変わりを願う風習である。

グレンバックは、ゲルマン人は、先祖が氏族の誰かに生まれ変わる観念をもっていたというが、『エッダ』には生まれ変わりが詳しく述べられている話はない。ただ「ヒョルヴァルズの子ヘルギの歌」では、ヘルギとその妻スヴァーヴァは生まれ変わったと記されている(37)。

中世西欧にひろまったカタリ派は転生を繰り返して靈魂が救済に至ると唱えたが(38)、これは近代スピリチュアリズムに影響を与えた。カタリ派の転生は人間だけではなく動物も含まれた。「完全な靈魂」になれば天の靈(プラトンの善のアイデアのようなものか?)との合一という救済がある。天の靈とは自分の善なる靈である。現世の魂とは区別される。だから現世の魂と肉体は悪とみなされる。

生まれ変わりの観念は世界の多くの民族にみられるもので、アフリカ、シリア・レバノン、パプアニューギニア、インドネシア、アメリカ先住民、オーストラリアのアボリジニー、アイヌなどに見られ、竹倉史人は親族の誰かとして生まれ変わると述べる。折口信夫を読むと、生まれ変わりの観念は、沖縄や古代日本にもあったようだ(39)。しかし、神話のなかでは生まれ変わりは親族に限定されてはいない。

ペルーの神話では、靈魂のいくつかは、岩、川、湖、その他もろもろの地勢となる。また、人間は肉体とは別に2つの靈魂をもつという。1つは生命の靈魂であるアトゥン・アハヨで、これが肉体に必要なあらゆるものを支える。この靈魂が肉体を離れると肉体は死ぬ。アトゥン・アハヨは、8日の服喪期間家に留まり、家族といっしょに食事をする。もう1つはフックイ・アハヨという靈魂で、この靈は肉体が睡眠中に肉体を離れることができ、彷徨って受けた印象を夢の形で伝える(40)。これはエジプト神話のカアとバアという2つの靈魂に類似している。自由に飛翔できる靈魂はシャーマニズム的性格のものである。

この2つの靈魂という考えはキリスト教化の遅れたラトビア、エストニア、旧プロシアにもあった。1つはシーラで木、鳥、動物、赤ん坊に生まれ変わる。もう1つのヴェレは他界へと赴く(41)。アイヌの場合は、人(親族)に転生するようである。(42)。

ピュタゴラスの影響を受けたプラトン(43)、『パイドン』で、死者たちは裁きの場に引き出され、善行をなした者、悪行を成した者、普通の者の魂は、それぞれの場に行くときソクラテスに語らせている。哲学によって己を浄めた人々は、上方の世界で全く肉体から離脱した生活を送るという。悪行を成した者と普通の生を経験した者は、それにふさわしい場所に行く。

『国家』には有名なエルの物語が語られている。冥界に行ったエルの見聞という形で話は進む。それによれば、牧場に裁判官たちがおり、天と地に2つずつ穴が開いている。正しい魂は天の穴へ、不正な魂は地の穴に向かう。地は地獄である。天に行った魂も地に行った魂も、再び牧場に戻ってくるのだが、地での滞在は千年続く。牧場に戻った魂は旅に出て光の世界に赴く。そこで籤引きして順番を決め、次の生を選択する。僭主の生を選択する者もいた。オルペウスは白鳥の生を選択する。女性たちに殺されたから女性の腹に生まれるのを嫌ったからだという。動物の魂も人間同様の過程をたどる。次の生に生まれる前、レーテ忘却の河の水を飲んで過去は忘れる。

この輪廻転生説は、生前の行為が天国行きと地獄行きを決めるが、それは次の生には影響せず、来世は自己選択となっている。いずれにせよ、輪廻転生に審判の概念が付加されたものである。『パイドン』の、哲学によって己を浄めた人々は、上方の世界で全く肉体から離脱した生活を送るという記述は、輪廻の牢獄からの解放と解釈できる。

『パイドロス』では、魂の不死が語られた後、魂の本来の相を翼をもった一組の馬と、その手綱をとる翼をもった馭者とが一体となって働く力に喩えている。馬と馭者はすべて善であるが、神以外のものにおいては、善きものと悪いものが混じり合っている。人間の場合、馭者が手綱をとるのは2頭の馬だが、1頭は美しく善であるが、もう1頭は正反対である。翼のそろった完全な魂は、天空高く駆け上がって、あまねく宇宙の秩序を支配するが、翼を失うときは、何らかの個体におつかるまで下に落ち、土の要素から成る肉体をつかまえて、そこに住みつく。この魂と肉体が結合された全体は「生けるもの」と呼ばれ、そしてそれに「死すべき」という名が冠せられることとなった。ここには、人間には善悪2つの要素が存在するというピュタゴラス派の影響がみられる。

さて、『パイドン』は続けて、人間の魂も馬に煩わせつつ天球の外の真実性を観賞する場合がある。しかしある魂は馬が暴れるため真実性の一部しか見ない。また別の魂は翼が折れ、真実性の観賞ができない。真実性を観そこなった魂は、地上に落ちる。そして、この世に生まれる最初の代においてはいかなる動物のなかにも植え付けられない。真実性をこれまでに最も多く観た魂は地と美を愛する者、あるいは音楽を好む者、恋に生きる者の人間の種となる。以下、2番から9番までの生まれ変わる人の種類が説かれる。これは前世による行いの善し悪しによって次の生がきまるという因果応報である。魂がそこからやって来た場所（天空の外の真実性）に戻るには1万年を要する。翼が生じないからである。しかし、知と美を愛する生を送ったものは、1千年の周期が3回目にやってきた時、3千年で帰還できる。それ以外の魂は、最初の生涯を終えると裁きかけられ、ある者は地下の仕置き場、ある者は天上のある場所でそれにふさわしい生活を送る。そして千年経ったら、どちらの魂も、次の生のための籤引きをして、それぞれが欲する生を選択する。

肉体（ソーマ）に閉じ込められた魂は善行を積むことで魂が浄められ、輪廻の呪縛を離れて真実性に帰還するとプラトンはいつているのである。これはヒンドゥー教・仏教に類似する？

プラトンの輪廻転生説はピュタゴラスの影響があるといわれる。ピュタゴラスはオルペウス教信者だったといわれる。オルペウス教とは秘儀であったが、次のような教義があったらしい。ゼウスの子ディオニュソスをゼウスの宿敵ティタン神族が八つ裂きにして食べてしまった。怒ったゼウスは稲妻で彼らを焼き殺し、残されたディオニュソスの四肢をアポロンに言いつけて、デルポイのアポロン神殿に埋葬させた。女神ヘラが救出したディオニュソスの心臓から、ゼウスはディオニュソスを再生させる。それから彼はティタン族の灰から人間を作った。このため人間は、ティタンのような悪の要素と、ティタンが食したディオニュソスの神的要素をもつことになる。来世（次の生）に幸せになるためには悪の要素を切り離さなくてはならない。そのために、人はこの世で秘教に入信し善行を積む。

オルペウスは、死んだ妻エウリュディケを取り戻すために冥界に下ったことで知られている。この連れ戻しは失敗するが、オルペウスは豎琴の名人で、最期は女性たちに八つ裂きにされ、豎琴が星になったという神話もある。肉体の八つ裂きはシャーマンのイニシエーションで見られるものであり、冥界に魂を取り返しに行くのもシャーマニズムである。ただ輪廻転生はシャーマニズムの特徴ではない。オルペウス教は古い民間信仰が元になっているという。生まれ変わりの発想が相当古いということなのだろう。しかし、ヘロドトスによれば、生まれ変わりの発想はエジプト人から由来するという(44)。

9. 宇宙樹

宇宙樹（ユグドラシル）は北欧神話由来である。9つの世界（層）を結びつけている。しかし、宇宙

＝世界が層を成しているという観念、それを木で表す発想はいくつかの民族神話にも登場する。もともと層が複数あるという観念が先にあって、それを垂直の木で表現したと解釈する方が自然である。

宇宙樹は滅亡と再生を繰り返す。宇宙の多層が崩壊と誕生を繰り返すということなのであろうか。『エッダ』では9つの世界の1つが死者の国（ニフルヘイム）である。神々の世界、人間界、死者の世界は宇宙樹で結びついている。人間界と死者の世界は橋で隔てられている。

マヤの神話でも世界は宇宙樹で示される。地下にある死者の国ミクトランは魂の安住と安らぎの地である。これとは別に地下と天界（神々の世界？）との間に楽園トラロカンが設定されている。楽園（地下世界とどう違うのか。複数神話が混在している）には豊富なトウモロコシ、ガボチャ、トマト、豆、花などがあって、ここに4年間滞在した後、魂はもう一度現世に戻ってくる（生まれ変わり）。死と再生を永遠に繰り返す。トラロカンより上方には「肉体のない国」と「太陽の家」があって、そこに行けば、永遠の循環から解放される（45）。ヒンドゥー教・仏教に近い概念である。

死後の審判、天国、楽園、極楽浄土、地獄という観念は、人類の原初的の信仰にはなかった。古層の神話は、死者の国と現世はもともと1つであったが、人間の失敗で異界が創出した。ただ2つの世界は塞がれてはいない。現世での死は異界での誕生であり、異界から現世に生まれ変わり誕生する。また、中間形態として死者を異界に取り戻しに行く場合がある。

異界が多層性になると宇宙樹という観念が出てくる。これも原初的なものだろう。現世の他に複数の世界（その1つあるいは複数に死者の国）がある。木でイメージされたのは天と地との垂直方向で人類が生活していたからであろうが、西や遠くの島に死後の世界を置く神話もある。これは水平方向である。いずれにせよ垂直・水平は現世の反映で複数世界の存在を神話は語る。複数層は垂直でも平面でもない。異界の空間と時間はこの世の規準とは異なると考えられるからだ。

靈魂の不滅はどの民族もほとんど共有するが、靈魂が2つあるという神話が、エジプト、南米、太平洋、東欧で確認される。

各神話を総合すると、以下ようになる。我々の世界は多層世界で現世も死者の国もその1つである。死者の国は、現世の映し鏡であることが多い。世界宗教にある罪の代償としての地獄概念はない。死後、異界に永住するか現世に生まれ変わる。

10. シャーマンのみる異界

シャーマン、シャマンはツングース後のsamanに由来する。元々はシベリアと中央アジアの宗教現象と捉えられた。日本語では呪術師や霊媒師などと訳される。シャーマンの能力は、脱魂(ecstasy)と憑依(possession)に大別される。いずれもトランス状態で、前者は体から魂を離脱させ、異界に赴くこと、後者は、シャーマンに靈的存在が憑依することをいう。いずれも靈界との接触で予言や病氣治癒をおこなう。世界各地の神話に同様な現象が確認される。脱魂は「幽体離脱」とも考えられ、臨死体験と同一視することもできる。また各宗教の神秘主義、仏教の悟り、薬物を使った幻覚と同一視する見解もある。

シャーマンの型として脱魂ecstasyと憑霊・憑依possessionが学術的に使われる。ここでは前者のみ対象とする。エクスタシーとは、ギリシア語原で「外に立つ」という意味だから脱魂は適訳であろう。トランス状態のなかで体から魂が抜け出て、上昇や下降する。脱魂は、臨死体験の際にみられる体外離脱や幽体離脱out-of-body experienceと同種のもので理解できるが、脱魂はシャーマンが意図的・主体的にそれを操作できる点が異なっている。

エリアーデの定義によれば(46)、シャーマンの魂は、天界に上昇し、地下に下降し、もしくは空間遠く飛翔する。その目的は、①病人の魂を探す。②いけにえにした動物の魂を神々に運ぶ。③死者の魂を地下界あるいは新しい住居に導くことである。エリアーデによれば上昇の方が先行的・普遍的である。冥界行きは死と再生の表現である。シベリアのシャーマンのイニシエーションでは、シャーマンの肉体は冥界で解体される。

アルタイ・シャーマンは7つの連続した階層(プダク=障碍)を垂直に降りていく(47)。シャーマンのまわりには先祖たちや補助霊がお供している。それぞれのプダクを通過するごとに、彼は新しい地下界の神の顕現を見る。第二のプダクでは金属音を聞く。第5のプダクでは波が逆巻き風が唸っている。最期の第7のプダクでは(ここに地下界を流れる9つの河の河口がある)、石と黒粘土でつくられ、あらゆる方向に防備を固めたエルリク・カーンの宮殿を見る。そこで彼はエルリク・カーンに長い祈りを捧げる。それからユルトに戻り、聴衆に旅の結果を語る。

別ヴァージョンは、異界への穴にはいっていき、まず平野に出、それから細い橋が架かっている海に出る。橋を渡るとエルリク・カーンの住処に向かう。召使いに贈り物をして懐柔しカーンのユルトにはいる。シャーマンは自分の名と先祖たちの名前を言い、エルリクに酒を飲むよう誘う。エルリクは酒を飲み干す。これらの冥界下降は、病人の魂を発見し連れ戻すためにおこなわれる。逆に、死者の魂をエルリクの国へ連れて行くための場合もある。死者の国はこの世の逆さ映しとなっているが、現世と同じ生活がある。エスキモー・シャーマンの行く冥界も逆さまの世界である。冥界の食べ物を食べると現世に戻れないので食べない。アイヌの冥界も現世とあべこべであることは前述した(48)。

シャーマンは鳥の衣装を着けている例が多い。エリアーデによれば、世界樹にとまっている鷲といった神話的関連があるという(49)が、飛翔する魂の象徴である。骨を模した衣装もある。骨は死者を表す。シャーマンとは、死者の世界から蘇った者である。死→再生を実現できる者である。これがイニシエーションとなる。

ところで、単純に結びつけるのは危険であるが、神話にみられる「神々の冥界下り」はシャーマンの冥界下りの反映ではないのか(下りは地下世界を表すとは限らない)。シャーマンは死んだ死者の魂を冥界に行って探し現生に持ち帰り蘇らせることもあるからだ。これはエリアーデも気づいていた(50)。エリアーデはユカギール人の例を紹介している。シベリアのユカギール人は、死後、魂は3つに分かれる。1つは遺体に残り、1つは冥界(影の国)に行き、もう1つは天界に行く。シャーマンが病人の魂を探しに行くのは影の国である。そこには冥界の門番がおり、河を舟で渡る。影の国は現世と同じような生活をしている。冥界の食物を食べるとシャーマンは現生に戻れないというのも神話に反映されている。さらに、シャーマンは、別の理由で影の国へ行く。その国から魂を盗んできて、それを婦人の子宮に入れ、魂を地上に生まれさせる。死者の魂は現生で新しい生活を始める。これは輪廻転生を示唆している。

以下は、ゲルマン神話の英雄ハディングスの冥界下降の例である(51)。ハディングスが夕食をとっていると突然1人の女が現れ、自分についてくるよう頼む。二人は冥界に下り、じめじめした暗黒地帯を横切っていくと、1本の踏みならされた道に出る。その道に着飾った人々が歩いている。二人はそれから、あらゆる種類の花の咲いた陽の当たる場所を通り、河に出、橋を渡る。互いに戦っている2組の軍隊に会う。女によれば、戦いは終わることはない。彼らは地上での戦争に倒れ、今なお、戦闘を続けている兵士たちである。最期に2人は壁につきあたる。女はそこを通過しようとするがダメである。そこで彼女は連れてきた雄鶏を殺し、壁の上に投げる。少したつと雄鶏は生返り、壁の向こう

で鳴く声が聞こえる。

シャーマンの脱魂は、天界へ上昇する場合と地下へ下降する場合がある。地下の場合、冥府の入り口が穴で表現されることが多い(52)。

南カリフォルニアのチュマシュ族の事例は以下の通りである(53)。

昔アクシワリクという名前の肺病人がいた。アクシワリクは賢人の1人であったが、病を治す自分の能力の限界を感じ、村を出て死に場所をもとめた。彼は海に向かい、波打ち際にそって歩いた。夜に成り休憩するために立ち止まり座り込んだとき、驚くべきものを見た。1つの光が絶壁から出現した。彼は光を捕まえようと試みた。光をわしづかみにした。光は小さなペレペルと言って、放してください、家に帰りたいですと言った。アクシワリクはこれを聞くと、ペレペルに、自分を一緒に連れて行くように言った。2人は絶壁のちいさな穴から入り、長いトンネルを下降していった。トンネルのつきあたりで大きな家に着いたが、ペレペルは姿を消していた。大きな家の中にはたくさんの動物がいるように思われた。コヨーテ、熊、山猫、その他大勢の4つ足動物が、アクシワリクの上に排便した。老鹿が近づいて、アクシワリクに、なぜおまえはここにいるのかと訊ねた。私は病人で回復できずにいると答えた。そこで動物たちはアクシワリクを入浴させ、アクシワリクは回復し食事を始めた。彼を癒やした老鹿は、アクシワリクを送り返した。彼は自分の村に戻った。彼は3日と思ったが、現世では3年が経っていた。これは、シャーマンの加入儀礼の話であろう。異界と時間が違うのは浦島子伝説に通じる。病人が期せずしてシャーマンとなる例である。死からの再生は臨死体験と似ている。

冥界が現生の映し鏡になっていることを、アルタイ系シャーマニズムを研究したハルヴァが述べている(54)。冥界でも仕事があり生活がある。ただ地上とは逆さまになっている。昼が夜で、夏が冬というように。死後の世界には審判も因果応報もない。シャーマンの仕事は死者の靈魂を無事に死者の国に送り届けることである。シベリアのアルタイ族も多層世界の観念があり、天地でそれぞれ7層や9層ある。

おそらく外来宗教との接触で、次のような伝説もある(55)。

冥界の王イルレ・カンの娘は、黒いキツネになって地上で悪事をいろいろ仕掛けた。ある時、勇者コムディ・ミルゲンがこのキツネを追いかけるうち道に迷い、足まで折ってしまった。するとジルベゲンという九首の怪物が大地から現れた。怪物は英雄の首を切り落として、下界へ運び去る。英雄の妹クバイコは、兄の屍にとりすがって泣いているうちに、首がなくなっているのに気づき下界へ探しに行く。彼女は怪物の足跡をつけていくうちに、イルレ・カンの国に通じる穴を見つけた。その道で迷い歩いている間に不思議なものを見た。1つの桶からもう1つの桶にいつまでも乳を注ぎ続けている女、砂漠で杭につながれている馬、ある所では人間の半身が川をせきとめていた。他のところでは全身でも堰き止められなかった。クバイコはさらに進んで地の深く降りて行った。だんだん強い槌の音が聞こえ始め、やがて40人の男たちが鋸40挺とやっこ40挺を作っていた。少女は1つの流れの岸に着いた。川は高い山のふもとを流れており、山の上にはイルレ・カンの四十角の大きな石家があった。入口の前には1本の株に9本のカラ松が生えていた。9人の冥土の王が馬をつなぐこの樹にクバイコも馬をつないだ。少女は冥土の王の住処に入り、戸を閉めた。なかは真っ暗であったが、見えない手につかまれて着物は引きちぎられ、押さえつけられた。クバイコは不安で声をあげると扉が開いて部屋に光が差し込み、下界の君主らの首領アタマンが少女のところへやってきた。少女はその後についていった。空っぽの部屋をいくつも通りぬけて、やがて人間のようなものがある小部屋にやっ

てきた。そこに夢中で糸を紡いでいる老婆がいて、その他の部屋にもいたが仕事はしていなかった。老婆たちは何かを飲み込もうとしているのだが、のどのところでつまっていた。三番目の部屋には中年の女がいて首に大きな石をつけていた。手にもついて動けないようだった。第4、第5、第8まで続くが、ここは餓鬼や地獄の描写。第九の部屋には1組の夫婦が安らかに眠っていた。第十の部屋に8人の冥土の王侯が車座になって、そのなかにイルレ・カンがいた。クバイコ王侯らにお辞儀して、なぜ兄の首を切り落として持ち去ったのかを尋ねた。王侯らは、もし7つの角をもおった羊を大地から引き離してくれば頭は返してやろうと言った。羊は大地にのめりこんでいて角だけみえるという。クバイコは応じた。彼女は冥土の王侯に連れられて人間の頭がいっぱいつまった9つの部屋を通った。これらのなかに兄の頭もあったので少女は泣いた。十番目の部屋にその羊がいて、クバイコは羊を引っ張り出した。冥途の王侯らは彼女の強さを目の当たりにし兄の頭を返して、先のカラ松の根元に持ってきた。クバイコは、帰路、冥途で見たことの意味を王侯らに尋ねた。乳を桶から桶に移している老婆は、生前、水を混ぜた乳を客に出した罰を受けている。第三の部屋で、首と腕に石をぶら下げた女たちは、バターを売ったとき目方を上げるために中に石を隠していた連中だ等々、生前の悪事の無報いを王侯は答えた。説明を聞くと、王侯らと別れ、クバイコは兄の首と胴をくっつけて、神から貰った生命の水を振り掛けて死者を生返らせた。現世に戻った。

ここには因果応報の概念が明確に読み取れる。クバイコがシャーマン的であることは明らかである。兄の魂（頭）を探しにいったのである。カラ松の根元は世界樹の生命創造の場所なのだろうか。そういえば、北欧『エッダ』の世界樹の根元にも生命の泉がある(56)。

11. 臨死体験、スエーデンボルグ、神智学協会

ところで、立花隆が『臨死体験』という本を書いている(57)。臨死体験とは、事故や病気などで死の淵を彷徨った人が意識を回復して語る体験で、体外離脱したとか、死後の世界を垣間見たといったものである。これは現実の体験という意見と脳内現象が起こす幻覚にすぎないといった意見に分かれていて、科学的には決着はついていない。決着することもないだろう。いずれも立証も反証も不可能だからである。

臨死体験や体外離脱研究はアメリカではすでに多くおこなわれている。その辺の事情はさすがアメリカだと思うが、それはさておき、臨死体験の場合、死後の世界の前で戻ってくるわけだから、死後の世界を垣間見た程度である。

この研究に先鞭をつけたムーディーによれば(58)、以下の要素が語られる。

- ①医師による死亡宣告を聞く。
- ②耳障りな音が聞こえる。
- ③長い暗いトンネルを通り抜ける。
- ④体外離脱。
- ⑤他者に会う。
- ⑥光との出会い。
- ⑦生涯を一瞬で回顧する。
- ⑧現世とあの世の境界線に近づく。
- ⑨喜びに包まれ、戻りたくない気持ち。
- ⑩生還する。

各人によってすべての要素が入っているわけではない。他の研究ともあわせて考えると、最も多いのは、暗いトンネル、体外離脱、光との遭遇である。③と④は順序が逆だろう。体外離脱してからトンネルに入るのではないのか。

またこれらは、欧米人の体験で、立花の本を読むと文化によってかなりの変更がある。日本では、体外離脱、トンネル、川、花畑が多い。川は三途の川である。ムーディーの⑧の境界線と同じようにも思える。花畑＝光とも解釈できる。死者の国のイメージは、ムーディーの⑨によれば、喜びに包まれ、戻りたくないという気持ちになって明るい幸福な世界である。日本の花畑もそうであろう。つま

り暗いトンネルを抜けると明るい幸福な場所に行くという筋書きである。ここでは、死者の国は天国・浄土のように描かれる。

これが、インドの事例になると、たとえば、三日三晩昏睡状態が続き意識を取り戻した10才の男性は、「2人の男がやってきて、どんどん歩かせた。椅子に座った恐ろしい顔の男の前に連れて行かれた。ヤムラージュだった。ヤムラージュは、僕をつれてきたことに怒って、俺が連れてこいたのは別の者だ。男たちは僕を連れて帰った」。ヤムラージュとは閻魔大王である。インドのバージョンは閻魔大王のもとに引き出され、死ぬのは別人だと判明して生還するものが多い。この話の原型はインドの民間伝承にあるらしい。インドの場合、体外離脱、光の存在はほとんどない。死者の国のイメージは明るくも暗くもない。やはり、文化的伝承がすり込みされた脳の幻覚なのだろうと解釈するのが学問的なのか。あるいは調査事例が少ないからか。ちなみに、トンネルのような穴の向こうに光があって、そこが天国という絵画は、16・17世紀ヨーロッパでは好んで描かれた(59)。

18世紀のスエーデンの天才といわれたスエーデンボルグによれば(60)、人間は肉体の内部に「霊的肉体」をもっている。霊的肉体が肉体から離脱するのが死である。霊的肉体は死後の世界で生きている。霊的肉体もあらゆる感覚・願望などをもっている。

死後の世界は現世の映し鏡のようであるが、すべてが霊的なもので時間も空間も固定していない。死後3日して霊界に入る。霊界は天界と地界からなりそれぞれ3層になっている。天界と地界の間に中間層があって、多くのひとはそこに入る。ここから天界か地界に行くが、それは審判によるものではない。善人は天界へ、悪人は地界へ向かうが、それは自由意志による。天界は至福の世界だが社会があり職業もある。地界は悪に満ちた社会がある。天界と地界の間に中間世界があり、これらはすべて状態である。たえず流入と流出がある。霊的肉体は不滅である。輪廻転生して現世に戻ることはない(はっきり言っているわけではない)。永遠に霊界で生きるという。ここでは、宇宙樹、あの世は現世の映し鏡という神話に似た世界像が描かれる。哲学者カントは、スエーデンボルグの話空想の産物として退けた。ただ、カント自身は唯物論者であったわけではなく、霊的存在や霊界を全く否定しているわけではない。それは理性(思考)では捉えることは出来ないから無意味と断じている(61)。

臨死体験を数多く集めたキューブラー・ロスは、体外離脱する何かを「霊的身体」と呼んでいる(62)。霊的身体が、死にかけた自分の身体を眺めている光景が多々あるという。彼女はスエーデンボルグとは逆に輪廻転生を認める。

スエーデンボルグとは反対に、輪廻転生を強調するのが、1875年ブラヴァツキーらによって創設された神智学(Theosophy)協会である(63)。これによれば、魂は輪廻転生を繰り返しながらより良く成長していくらしい。人間以外には転生しない。死後の世界は複数層から成り、魂の成長度によって、高次の層へと上昇していく。転生時には前世の業を背負っていく(因果応報)。転生は最高層にたどりつくまで繰り返されるという。神智学という言葉はブラヴァツキー以前からあったもので、ショーレムによれば、ブラヴァツキーの主著Die Geheimlehreは、13世紀のユダヤ神智学のゾーハル文書の盗用という。従って、彼は、近代の神智学協会を疑似宗教と批判する(64)。

臨死体験はともかく、スエーデンボルグと神智学協会は、古来東西の宗教・哲学を組み合わせた創作に思えてしまう。とくに神智学協会はヒンドゥー教・仏教に近いが、欧米の思想家の発想は人間中心主義である。これは、やはりキリスト教の影響だと思う。

おわりに

以上、私なりの角度から異界のイメージを概観した。神話やシャーマニズムなどの例から、いくつかの共通項は見いだすことができる。異界は、現世の映し鏡、多層世界（宇宙樹）である。審判による天国も地獄もない（因果応報はない）。靈魂は実体（複数の場合も）がある。靈魂が現世に生まれ変わる場合がある。それに対して、世界宗教に共通しているのは現世の行い（カルマ）の審判による来世の決定である。因果応報である。

古層・基層は前者である。とはいっても、私は、「未開人」の「原始宗教」から「文明人」の世界宗教に発展するといったような進化論的立場はもちろん取らない。むしろ基層に、人類共通の「何か」が隠れていると思っている。

本稿は、あくまで異界イメージの概観である。さらに踏み込んだ考察は次稿で試みる。

注

- (1) デカルト『方法序説』谷川多佳子訳、岩波文庫、2020年、第5部；『情念論』谷川多佳子訳、岩波文庫、2022年、第1部。
- (2) オカルティズムでは、人間は肉体の他にエーテル体とアストラル体をもっている（フレッド・ゲティングス『オカルトの図像学』阿部秀典訳、青土社、1994年、96頁、124頁）。
- (3) マルチェロ・マッスィミーニ・ジュリオ・トニーノ『意識はいつ生まれるのか-脳の謎に挑む統合情報理論』花本和子訳、亜紀書房、2015年、第7章。
- (4) カール・ベッカー『死の体験-臨死現象の探求』法蔵館、1992年、48～49頁。
- (5) 以下の宗教の記述、下田淳『世界文明史』昭和堂、2017年、第IV部参照。
- (6) 菊池達也『イスラム教における死生観と死後の世界』大城道則（編）『死者はどこにいくのか-死をめぐる人類5000年の歴史』河合ブックス、122頁以下。『コーラン』（上）井筒俊彦訳、岩波文庫、1957年、251頁。
- (7) ゲルショム・ショーレム『ユダヤ神秘主義』法政大学出版局、1985年、373頁以下。Wikipedia, Reinkarnation; Zweites Konzil von Konstantinopel, Gilgul, Origenes; 市川祐「生と死をつなぐ想像力」細田あや子・渡辺和子編『異界の交錯』上巻、2006年、リトン、210頁。ブライアン・L. ワイス『米国精神科医が体験した輪廻転生の神秘 前世療法』山川紘矢・亜希子訳、PHP文庫、1996年、31頁。J・L・ホイットマン他著『輪廻転生-驚くべき現代の神話』片桐すみ子訳、人文書院、1989年。ホイットマンやワイスが提示している諸事例が後述する神智学に酷似しているのは偶然なのだろうか。
- (8) 青木健「古代ペルシアにおける「生と死」」松村一男編『生と死の神話』リトン、2994、203頁以下。
- (9) ヴェロニカ・イオンズ『エジプト神話』酒井傳六訳、青土社、1991年、264頁；村治笙子・片岸直美＝文、仁田三夫＝写真『図説エジプト「死者の書」』ふくろうの本、2002年。
- (10) 杉勇・尾崎亨訳『シュメール神話集成』筑摩書房、2015年、43頁以下。岡田明子・小林登志子『シュメール神話の世界-粘土板に刻まれた最古のロマン』中公新書、162頁以下。安田登『イナンナの冥界下り』ミシマ社京都オフィス、2015年。
- (11) 『リグ・ヴェーダ賛歌』辻直四郎訳、岩波文庫34頁以下、229頁以下、246頁以下、332頁以下；1970年；『ヴェーダ・アヴェスター』世界古典文学全集3、辻直四郎編、筑摩書房、1967年；『ア

- タルヴァ・ヴェーダ賛歌-古代インドの呪法-』辻直四郎訳、岩波文庫、1979年；岩本祐編訳『原典訳ウパニシャッド』ちくま学芸文庫、2013年、9頁、71頁以下；辻直二郎『ウパニシャッド』講談社学術文庫、1990年；中村元『原始仏典』ちくま学芸文庫、2011年。
- (12) ジェフリー・パリンダー『アフリカ神話』松田幸雄訳、青土社、1991年、116頁以下。
- (13) 『中国昔話集』1, 東洋文庫、馬場英子、瀬田充子、千野明日香編訳、平凡社、198頁。
- (14) 阿部年晴『アフリカ神話との対話』三恵社、2018年、23頁以下。
- (15) ロズリン・ポインヤント『オセアニア神話』豊田由貴夫訳、青土社、1993年、332頁以下。
- (16) R. アードス・A. オルティス『アメリカ先住民の神話伝説』下、青土社、1997年、241頁以下。
- (17) 『古事記』倉野憲司校注、岩波文庫、1963年、28頁以下。『古事記』中村啓信訳注、角川ソフィア文庫、平成21年、263頁以下。『日本書紀』井上光貞監訳、中公文庫、2020年、102頁以下。
- (18) アントニー・アルパーズ『ニュージーランド神話』井上英明訳、1997年、107頁以下。
- (19) 後藤明『世界神話学入門』講談社現代新書、2017年、8頁以下。
- (20) 『アフリカ神話』138頁以下。
- (21) オセアニアのメラネシアでも冥界は現世のレプリカだという(白川千尋「近くて遠い異界」細田あや子・渡辺和子編『異界の交錯』上巻、2006年、リトン、400頁。
- (22) P.R.ハーツ『アメリカ先住民の宗教』西本あづさ訳、青土社、2003年、133頁以下。
- (23) 山田孝子『アイヌの世界観』講談社学術文庫、2019年、51頁以下。古東哲明『他界からのまなざし』講談社選書メチエ、2005年、30頁。
- (24) 『オセアニア神話』145頁以下。172頁以下。
- (25) アイリーン・ニコルソン『マヤ・アステカの神話』松田幸雄訳、1992年、46頁以下。
- (26) ハロルド・オズボーン『ペルー・インカの神話』田中梓訳、青土社、1992年、234頁。266頁以下。290頁以下。
- (27) 渡辺和子「メソポタミアの異界往還者たち」細田あや子・渡辺和子編『異界の交錯』上巻、2006年、リトン、23-24頁。
- (28) ハワード・ロリン・パッチ『異界-中世ヨーロッパの夢と幻想』黒瀬保他訳、三省堂、1983年、8頁。
- (29) 三津間康幸「シリア・キリスト教における梯子物語」『異界の交錯』上巻、105頁。
- (30) 立花隆『臨死体験』上、文春文庫、2000年、37頁。
- (31) フェリックス・ギラン『ギリシア神話』中島健訳、青土社、1991年、248頁以下。
- (32) スチュアート・ペローン『ローマ神話』中島健訳、青土社、1993年、170頁以下。
- (33) トンヌラ・ロート・ギラン『ゲルマン、ケルトの神話』清水茂訳、みすず書房、1960年、24頁以下、145頁。
- (34) 『オセアニア神話』252頁以下。
- (35) 『アフリカ神話』142頁以下。
- (36) K・ラングロー・パーカー『アボリジニー神話』松田幸雄訳、青土社、1996年、52頁以下。
- (37) Wilhelm Grönbech, Kultur und Religion der Germanen. B.1, Darmstadt, 1961, S. 295ff. 『エッダ-古代北欧歌謡集』谷口幸男訳、新潮社、1968年、110頁以下。
- (38) 原田武『異端カタリ派と転生』人文書院、1991年。
- (39) 竹倉史人『輪廻転生-(私)をつなぐ生まれ変わりの物語』講談社現代新書、2015年。小川直之

- 編『折口信夫 死と再生、そして常世・他界』アーツアンドクラフツ、2018年、38頁以下、61頁以下。
- (40) 『ペルー・インカの神話』164頁以下。
- (41) ジャックリーン・シンプソン『ヨーロッパの神話伝説』橋本慎矩、青土社、1992年、83頁以下；フェリックス・ギラン『ロシアの神話』小海栄二訳、青土社、1993年、106頁。
- (42) 山田『アイヌの世界観』77頁以下。
- (43) 左近司祥子『謎の哲学者ピュタゴラス』講談社、2003年、39以下。プラトン『パイドン』岩田靖夫訳、岩波文庫、1998年、162頁以下。『国家』（下）藤沢令夫訳、岩波文庫、1979年、397頁以下。『パイドロス』岩波文庫、藤沢令夫訳、2010年、67頁以下。
- (44) ヘロドトス『歴史』上、巻2, 123, 岩波文庫、1972年、276頁以下、492頁；レナン・ソレル『オルフェウス教』脇本由佳訳、白水社、2003年、145頁以下。
- (45) 『マヤ・アステカの神話』52頁以下。
- (46) ミルチア・エリアーデ『シャーマニズム』堀一郎訳、上、ちくま学芸文庫、2004年、31頁以下。
- (47) エリアーデ『シャーマニズム』上、338頁以下。
- (48) 山田『アイヌの世界観』241頁。
- (49) エリアーデ『シャーマニズム』上、270頁以下。
- (50) エリアーデ『シャーマニズム』上、404頁以下。
- (51) エリアーデ『シャーマニズム』下、153頁。
- (52) ジョーン・ハリフォクス『シャーマン-イメージの博物誌』松枝至訳、平凡社、1992年、12、35、68頁以下。
- (53) ハリフォクス『シャーマン-イメージの博物誌』12頁以下。
- (54) ウノ・ハルヴァ『シャマニズム-アルタイ系諸民族の世界像』田中克彦訳、三省堂、1971年、312頁以下。東洋文庫、第2巻、2013年、29頁以下。
- (55) ハルヴァ『シャマニズム-アルタイ系諸民族の世界像』第2巻、41頁以下。
- (56) 谷口幸男『エッドとサガ-北欧古典への案内』新潮選書、2017年、34頁以降。
- (57) 立花隆『臨死体験』上下、文春文庫、2000年。
- (58) レイモンド・A. ムーディー・Jr.『かいまみた死後の世界』中田善之訳、評論社、1989年；『続かいまみた死後の世界』駒谷昭子訳、評論社、1989年。
- (59) 神原正明『光の国へ-描かれたトンネル幻想』細田あやこ・渡辺和子編『異界の交錯』下巻、リトン、2006年、387頁以下。
- (60) 高橋和夫『スエーデンボルグ-科学から神秘世界へ』講談社学術文庫、2021年；エマヌエル・スエーデンボルグ『スエーデンボルグの霊界日記』高橋和夫訳編、たま出版、1992年。
- (61) カント『視霊者の夢』金森誠也訳、講談社学術文庫、2013年。
- (62) E・キューブラー・ロス『「死ぬ瞬間」と臨死体験』鈴木晶訳、読売新聞社、1997年。
- (63) アーヴィング・S・クーパー『神智学入門』林葉喜志雄訳、アルテ、2010年。H・P・ブラヴァツキー『神智学の鍵』田中恵美子訳、竜王文庫、1987年。
- (64) ショーレム『ユダヤ神秘主義』271頁、原注(83)頁。

注記以外の参考文献

- 『旧約聖書』新改訂、日本聖書刊行会、1974年
- アウグスティヌス『神の国』服部英次朗・藤木雄三訳、岩波文庫、1982～1991年
- 井上順孝・マイケル・ヴィッツェル・長谷川眞理子・芦名定道『21世紀の宗教研究-脳科学・進化生物学と宗教学の接点』平凡社、2014年
- ピアーズ・ヴィテブスキー『シャーマンの世界』中沢新一監修、岩坂彰訳、創元社、1996年
- レナル・ソレル『オルフェウス教』脇本由佳訳、白水社、2003年
- H. R. エリス・デイヴィッドソン『北欧神話』米原まり子・一井知子訳、青土社、1992年
- 河合俊雄・中沢新一・広井良典・下條信輔・山極寿一『〈こころ〉はどこから来て、どこへ行くのか』岩波書店、2016年
- ジョン・グレイ『オリエント神話』森雅子訳、青土社、1993年
- 小松和彦『異界と日本人』角川ソフィア文庫、2015年
- C. バーラント『アメリカ・インディアン神話』松田幸雄訳、1990年
- J・L・ホイットマン他著『輪廻転生-驚くべき現代の神話』片桐すみ子訳、人文書院、1989年
- 佐々木宏幹『シャーマニズムの世界』講談社学術文庫、1992年
- 佐藤正衛『北アジアの文化の力-天と地をむすぶ偉大な世界観のもとで』新評論、2004年
- 篠田知和基『世界異界神話』八坂書房、2021年
- イアン・スティーヴンソン『生まれ変わりの刻印』笠原俊雄訳、春秋社、1998年
- 田中仁比古『ケルト死話と中世騎士物語-「他界」への旅と冒険』中公新書、1995年
- グローリア・フラハティ『シャーマニズムの想像力-ディドロ、モーツァルト、ゲーテへの衝撃』野村美紀子訳、工作舎、2005年
- 羽金和彦「臨死体験-霊魂と死後の世界の起源」『関東医学哲学・倫理学会』?年
- ライナー・テツナー『ゲルマン神話』上下、手嶋竹司訳、青土社、1998年
- 永橋和雄『チベットのシャーマン探検』河出書房新社、1999年
- 矢島文夫『ギルガメシュ叙事詩』筑摩書房、1998年
- 吉田敦彦・古川のり子『日本の神話伝説』青土社、1996年
- 渡辺恒夫『輪廻転生を考える-死生学のかなたへ』講談社現代新書、1996年
- ヨハン・P. クリアーノ『異界への旅-世界のシャーマニズムから臨死体験まで』桂芳樹訳、工作舎、2021年

令和4年10月3日受理

An Imagination of the Otherworld.
Religion, Myth and Shamanism

SHIMODA, Jun